

# 自動化された「物語」から逃れるために

—— 国語の授業でなにをすべきか ——

難波博孝

## 一 自動化された物語の誘惑

### 一、一 「ちびくろさんぼ」の「物語」

以前、「ちびくろさんぼ」について調べたとき、論争の錯綜とした状況に驚いたことがある。私が驚いたのは、この論争に加わった人々が、対象となるテキストを精査せずに論じている場合が多かったことである。日本で出版された「ちびくろさんぼ」の種類は相当の数に上る。最も有名な岩波本にしても、大幅な変更がされている。そういう事を無視した議論が多くあった。極端な場合、ある人間が原書について論じているのに、彼と論争している側が岩波本を基にして反論していることもあった。

私は、「ちびくろさんぼ」にまつわる論争を調べた結果、次のような確信を持った。一つは、いわゆる専門家を含めた評論する人々さえも、作品のことばに正対せず、既に流布された作品解釈に影響されてしまうこと、二つめは、特に児童文学の場合その傾向が強いが、同じく作品のことばに正対せず、自己の内部に既にある解釈図式を安易に利用して作品を論じてしまうこと、三つめは作品のこと

ばに着目した論であっても、作品の中からことばを恣意的に選択して議論を展開しており、結局外側ないしは自己の内側の解釈図式に安易に乗っているに過ぎない（解釈図式を牽強する材料に使われるだけ）ことであった。

野家 (1990a) は、「科学、宗教、文学を問わず、存在論的コミットメントを支える概念図式や理論的枠組を「物語り」と呼ぶ」とし、現実・虚構を問わず世界に対する解釈の型・図式を与えるものを同じ名で呼んでいる。この「物語」概念を用いるとすれば、「ちびくろさんぼ」論争に見られた状況は、作品の解釈が作品のことばに立ち向かわずに既に知られているその作品の解釈の枠組みである「外部の物語」や、既に自己の中で存在している解釈図式である「内部の物語」によって、自動的に作られていったことを示している。

先に例として述べてきたことは、「ちびくろさんぼ」という物語についての「外部の物語」・「内部の物語」であり、いわば「メタ物語」ということができる。もちろん「物語」には「物語」についての「物語」というメタレベルのものだけでなく、現実世界自体を対象

とした「物語」もある。こういった「物語」はそのままでは自己にとって何の意味も有しない世界の中で、「無常迅速な時の移ろいの中で解体する自己に枯抗するためにこそ、われわれは多種多様な経験を記憶にとどめ、それらを時間空間的に整序する（野家1990b, 95）」機能を持っている。

だが、その「物語」が自動化・固定化したとき、人は判断停止状態のまま発言を・行動を起こす。私たちは狂った宗教を唱うことはできない。現にいささっきの授業で学習者に、「外部の物語」を強制的に与え判断停止状態にしてしまったのかもしれないのである。

一、二 授業における「物語」の吟味

私は授業における作品の読みだけを考えている。授業には教育内容が必要である。文学だけでなく説明文を含めた文章を読むことの教育において、私は、「その〈作品〉に衝撃を受け、読者自体の世界が作品の力によって変容させられる（田中1990c）」ことを教育内容の一つと考えている（このことについては後で論じる）。「外部の物語」や「内部の物語」によって学習者の読みが授業において進んでしまっているとしたら、この教育内容を全く達成することなく授業を終えてしまうことになる。ましてや、教師が「外部の物語」をおしつけてしまえば、その教育内容と逆行したことをしていることになる。

以上の問題意識の上に立って、読むことの教育を考えると、私たちは重大な問題に直面していることに気づかざるを得ない。それは、「内部の物語」や「外部の物語」なしで作品の読みを構築することなど可能なのか、という問題である。作品といっても言語構成物であるから、その解釈には解釈自身が持っている言語知識や世界

知識のスキーマが使用される。また、解釈に使われるスキーマは既に「外部の物語」から獲得した知識が含まれているだろう。それなら、「共同体の外にある概念装置としての了解不能の〈他者〉（田中）」をどのようにして立ち表したらいいだろう。私たちは、ここで解釈とは何か、そこで何が行われているのか、詳細に見る必要がある。

## 二 解釈過程の検討

### 二、一 音声言語の解釈

#### 二、一、一 表意の解釈

ここでは、「家に帰る道忘れちゃった」という児童のことばの実例で解釈の過程を考えたい。まず、児童がしゃべった音声「*kaerumiti wasureyatta*」に対して、音韻・文字・語彙・文法の知識を使って、「ばく（＝発話者）は家に帰る道を忘れちゃった」という意味が決定される。しかし、これで解釈が終わったわけではない。まず表面の意味（表意）が決定されたということになる。

この表意の決定までには、日本語の音韻・文字・語彙・文法の各知識が使われている。これらの知識は日本語を解釈する上でどうしても必要なものである。またこれらの知識による解釈結果は、その知識を持っている人なら誰でもほぼ一定になるだろう。これらの知識による解釈を、「コード知識による解釈」略して「コード解釈」と呼ぶ（難波1995）。

しかし、表意の決定はコード解釈だけではできない。主語が省略されていることがわかって（そのことはコード知識でわかる）、コード解釈では処理できない。解釈を行うためには、自分の記憶の

中を採って、その場面に適切な主語を同定しなければならぬ。これは、コードのような規則的なものではなく、その人が記憶の中から推論して選択する行為である。これを推論解釈と呼ぶことにする。多義語の意味決定の場合や、指示語の指示対象の決定も推論解釈によって一つに絞られることになるのである。「コード解釈」と「推論解釈」の概念については、関連性理論に換るところが大きい。スベルベル他参照。

さて、以上のように、表意の決定にはコード解釈と推論解釈の二つが関わるのが解った。しかし、これで解釈が終わったわけではない。「家に帰る道忘れちゃった」の表意として「はく(『発話者』は家に帰る道忘れちゃった)としても、このままでは聞き手の方は次の発話に困ってしまう。何とか深いレベルの解釈が必要となってくる。それが、推意の解釈である。

## 二、一、二 推意の解釈

推意の解釈は、もっぱら推論解釈の過程で行われる。それでは、「家に帰る道忘れちゃった」から得られた表意「僕は家に帰る道を忘れちゃった」を基に、どのような過程で推意が得られるか考えてみたい。関連性理論では推論解釈は、「演繹装置の記憶の内容、汎用短期記憶装置の内容、百科事典的記憶装置の内容、それに物理的環境から直接手に入れることができる情報によってある程度決定される(『二』)」と考えている。(『二』ではこれに従い、推論解釈の過程を考える。

演繹装置の記憶とは、推論解釈を行う際の形式的操作を行うものであり、ある情報から一般化を行ったり、類化したりする。汎用短期記憶装置の内容とは、それまでの会話や事の推意がどうであった

かの記憶(狭義の文脈)を含んでいる。百科事典(的記憶装置)の内容とは別名長期記憶と呼ばれているものであり、意味のネットワークを持つ意味記憶やそれまでの個人的な体験を含んだエピソード記憶などを含んでいる。そこには、発話者がどんな人物であるかという人物像についての記憶も含まれているだろう。物理的環境から直接手に入れることができる情報とは、その会話が成されたときの状況、発話者の行うノンバーバルなコミュニケーション、発話の音調などを含んでいる。

では、「家に帰る道忘れちゃった」で考えてみよう。その時の状況は「小学校の帰りの会で担任の先生の代わりに実習生が担当していた。帰りの会の後小学二年生のこのクラスの子どもが実習生に言った」ものであった。発話者は言いにくそうな態度で(ノンバーバルなコミュニケーション)つぶやくような声で(音調)言ったとしよう。その状況までには、実習生が「今日からコミュニケーションで図工の作品の展示会があります。家に帰ってから家の人と一緒に見に行きましょう」という発言があった。担任の先生はその時出張でいなかった(ここまで狭義の文脈)。この発話者である子どもは、母子家庭の子どもで母親は働いており、この子どもが帰宅する頃には家にはいなかった(人物像)。

さて、このように推論解釈に役立つ情報を集めた後、推論過程はどのように進むのであろうか。関連性理論では、「これらの要因は、単一の文脈を決定するのではなく、ある一定範囲の可能な文脈を決定するのである(『二』)」と考えている(『二』の文脈は広義の意味で使われている)。では、当該の発話の推意の決定に最も適切なものはどのように決められるのだろうか。「特定文脈の選択決定は関連

性を追求することでなされる(p.171)」。ここで、関連性理論では、関連性という概念を提出する。

関連性とはコスト (cost) と利益 (benefit) の関係についての概念である。利益とは、聞き手の世界に関する既存の想定 of 修正である。また、コストとはこの期待された修正をもたらすのに必要な量の心的努力である。利益という概念をもう少し詳しく述べると、長期記憶などに蓄えられた古い情報と発話や発話状況から得られる新しい情報が、「推論過程で前提として一緒に使われた場合、さらに新しい情報が引き出せる。このような情報はこのような古い情報と新しい情報の組合せがなくては推論不可能であった情報である。(p.171)」このさらに新しい情報 (これが推意となる) がえられることを、利益と考えている。

最も適切な関連性は、利益とコストの相関関係で決まる。無数の推意の内、コストが低くかつ利益が大きい推意が選ばれる。しかし、通常の会話状況においては、この選択は難しいことではない。「話し手は最適な (optimal) 関連性があるという期待、即ち、発話が十分な認知的利益を生み出し、聞き手がその利益に浴するため、不当な努力をかけさせられることはないという期待を持たせる」ように発話している。従って、「あらゆる解釈の中で伝達者が伝えようと意図していたのは聞き手が思いつく最初の解釈である。(p.206)」という考えようによっては、楽観的な結論となる。先ほどの「家に帰る道忘れちゃった」でも、利用できるだけの情報から、「実習生の先生に展示会についていってほしい」という推意に至ることは、それ程困難ではないだろう。

もちろん、「何を十分関連性がある」とみなすかは、情報が時間の

経過の中でどういう形で受け手に呼び出し可能になるか、あるいは呼び出し可能にできるかによって異なるのである。またそれは、受け手が頭をどれだけ活発に働かせているかによっても異なる (p.169) から、話し手が聞き手の状態をどのように捉えているかに左右されるだろう。しかし、話し手が聞き手の状態を的確に (このことばに問題を含んでいることは承知している) 捉えていれば、聞き手に最適な関連性を持つ推意を即座に呼び出せるような発話、ノンバーバルコミュニケーションなどを発することができるのである。

ここで、もう一度確認しておきたいことは、一つの文または表意に推意は一つではないということである。状況や狭義の文脈など使用できる情報を利用することで、さまざまな推意が生まれる。通常のコミュニケーションにおいては、最適な関連性を持つ推意が選ばれることで次の発話が行われるが、他の関連性の高くない推意も聞き手の中で消えることなく、いわば浮遊するイメージのように残ることになる。

## 二、二 文章言語の解釈

ここまでは、音声言語に焦点を当てて述べてきた。しかし、文章言語であっても、その解釈の本質は変わらない。読み手はコード解釈と推論解釈を行って、表意を決定し、推論解釈によって書き手の推意を推論する。ただ、推意決定の過程は、音声言語と文章言語とは大きく違っている。

まず、読み手と書き手との間には大きな断絶があることが挙げられる。手紙のように書き手のことを読み手がよく知っている時は別として、書き手がどんな人でどんな状況で書いているか読み手はほとんど知らない。もちろん、書き手の表情なども見えないし、文章

には音調もない。文章の解釈で推論解釈の根拠となるのは、文脈と文体ということになる。音声言語では、推意の決定のために、多くの材料があった。そのため、いろいろな可能性があってもかなり推意を絞り込める。しかし、文章の場合は、使える材料が、文脈と文体しかないため、推意（この場合書き手の意図）を一つに絞ることは、困難である。

従って、文章だけから書き手の意図（文章のテーマ・主題）を一つに絞り込むことは無理だと言わざるを得ない。読み手によって異なるだろうし、同じ読み手でも、読む時期が変わると、変わるかもしれない。まして、文章言語の場合は、文体が駆使されることによって複数の推意が印象深く生成している場合があり、その場合ますます書き手の意図を絞ることは困難になる。実はこのことがデリダのいう書き言葉の持つ「書き手の不在」による了解不可能性なのである。文字言語においては、推意の解釈においては推意を一つに決定することはできず、複数の推意が解釈の過程で生成され、（狭義の）文脈が進むにつれある程度の絞り込みはあるが、新たな記述によって再び複数の推意が生まれ、多声的なまま解釈が続くことになる。

## 二、三 「物語」の介入

さてとりあえず以上までの解釈についての分析を基に、「外部の物語」「内部の物語」の介入状況について考えたい。ただ、ここで留意しておかなければならないのは、私たちが忌避したいのは、自動的に固定的な「物語」を解釈の時に運用してしまうことである。

従って、正確に言えば、「外部の物語の自動的・固定的運用」「内部の物語の自動的・固定的運用」ということになる。

さて、音声・文字言語の解釈についてみると、まずコード解釈におけるコードは、確かに固定的・自動的な面を持つが、このコードは日本語というラングのコードであり、これがなければそもそも伝達は成り立たない。それを除いた推論解釈の部分はどうか。発話・状況・文脈などさまざまな情報から推意を生成し、音声言語の場合は最終的に最適な関連性を持つ推意を決定するのであるが、どんな発話にも対応できるような推論解釈のプロセスは考えられない。まして、文字言語の場合多声的なまま解釈が残されるのだから、そのような「物語の運用」は考えられないはずではある。

本論では、言語というラングの「自動的・固定的物語性」については論じない。これは、サピア・ウオーフの言語相対論などの興味深い思索とかかわるが、本論では、それ以後つまり推論解釈以後について考える。そうすると、音声・文字とも解釈において「自動的・固定的な物語の運用」はないことになる。ただ、気になるのは、多声的なまま残された文字言語の解釈である。私たちは、文字言語の解釈においてその先には進んでいないのだろうか。つまり、一つには絞っていないのだろうか。その作業は、音声言語の解釈にはない、つまり、関連性理論の範囲を超える所作ということになる。

## 二、四 世界構造と「物語」の介入

私は、物語文の場合、そこに三つの世界構造を区別して考える必要があると考えている。そして、それぞれの世界構造によって、推論解釈のあり方が変わってくると考えている。一つめは、人物が登場しさまざまな出来事が起こる、物語の世界である。ここでは、登場人物の行動・心理が、直接描写されたり、また情景描写などを通じて間接的に描かれる。二つめは、その物語世界を語る語り手が登

場する、語りの世界である。表に現れるにしろ裏に隠れているにしろ、文学作品の場合、語り手（話者）が物語を語る構造にほとんどの場合なっている。語りの世界の時間も、物語世界の時間とは異なったものとなっている。語りの世界は、語り手が、文章には現れない聞き手に向かって、お話を聞かせる世界なのである。三番目は作者の現実世界である。現実を生を受けた作者が、あるテーマを胸に（それは一つではないかもしれないし、作者自身が意識していない場合もある）作品を実際に書いた時間・空間によって、この世界は成立している。

まず、物語世界についての推論解釈を考えたい。この世界では登場人物の会話や行動から人物の意図・気持ち（すなわち推意）を推論することになる。会話文においては、会話の表現そのもの（文法）、会話の状況、話し手のノンバーバルコミュニケーションや会話の音調、話し手の人物像などについての情報が使用でき、音声言語の場合と同じ種類のものがありうる。しかし、当然のことだが、これらの材料は、作者が作品の中に書いていないと使うことができないし、また、音声コミュニケーションの場合、話し手と聞き手が場面を共有しているために、これらの材料を体感することができ、また自分の推論が適切かどうかフィードバックすることも可能だが、文章の場合、読み手は物語世界の住人ではないので、体感することも、登場人物に聞いたりすることもできない。しかしながら、物語世界の人物の会話からその推意を推論し、さらに最適な関連性を持つ推意を決定することはかなりできそうである。

次に、地の文からの推論であるが、人物の意図を推論するのに、音調や文体以外は使うことができる。最も顕著に使えるのは、ノン

バーバルコミュニケーションである。だいたい地の文では人物の行動を記している場合が多いのであり、そこから人物の意図を推論することはできる。しかし、一つに絞ることができる可能性は会話文に比べかなり落ちる。これを一つに絞ろうとすると、教師によるまた授業による「外部の物語の自動的・固定的運用」が現れるのである。

次に現実世界のレベルである。ここでは、作者の意図を推論解釈することになる。このレベルでは、使えるのが通常は文体と文脈しかない。ただ、これらは述べ方と同時に語られ方を表示しているのであり語りの世界レベルの語り手の意図の推論にも使うことになる。そこでどうしても、作者の意図を探りたい人々は、音声言語の推論解釈と同等の情報を集めようとした。それが、例えば、人物像に当たる作家研究であり、発話の状況に当たる執筆当時の状況の調査である。伝統的な文学研究は、作品研究において、現実世界の作家の意図を音声言語の発話状況のように扱おうとした涙ぐましい努力といえる。一方、ニュークリティシズムや構造主義のアプローチはそういった外部の知識を拒否した研究方法であるといえる。

しかし、後者の場合はもちろん事前者の場合でも作家の意図についての最適な関連性を持つ推意にたどり着くことはほとんど考えられない。それを一つに絞ろうとしたとき、再び研究者によるまた教師による「外部の物語の自動的・固定的運用」が現れる。

さて、先の後者のアプローチではほとんど語り手の意図を推論することと同じになる。語りの世界における語り手の意図の推論では使える情報は、文体と文脈以外にない。従来の内的構造にのみ限定した作品研究は実は、このレベルつまり語りの世界における語り手

の意図の推論を行っていたと私は考えている。

このレベルでは、例えば、描写における文体、あるいは構成の分析などが中心となるだろう。そういう分析をとおしてなぜそう語ったのかを探ることになる。ここで注意しなければならないのは、現実世界のレベルの情報を持ち込まないということである。作家が他にどのような構造の作品を描いたか、どんな人生を歩んだかは語りの世界には関係ない。もしそういう情報を持ち込むなら、それは作家の意図の研究であり、現実世界へのアプローチとなる。

従来の授業はもちろん、教材研究や作品研究（この両者は厳密に区別しなければならない。教材研究における教材の価値は教育内容によって決定される。それ以上のもではない。）でもこの三つの世界の区別は曖昧であった。それぞれの世界における、推論解釈で使える情報は区別されなければならない。語りの分析や登場人物の心情の把握のために、作家の知識を持ち込み、それによって、解釈を一義的に決定しようとするとき、作家の意志という「外部の物語の自動的・固定的運用」が現れる。

世界構造の考えを導入した今までのところで、もういちど「物語」介入についてまとめておきたい。現実世界レベルにおいては、人物の心情についての推論解釈は、音声言語に準じて最適な関連性を持つ推意が決定できる可能性がある、従って「外部の物語の自動的・固定的運用」の介入の余地はそれ程ない。つまり、授業で人物の心情を話し合っても学習者同士でそれ程違いはないだろうし（もちろん授業で学習者に人物に対する効果的な同化を行っていることが前提だが）教師が述べる解釈ともそうは違わないだろう。

問題は、語りの世界と現実世界のレベルである。ここでは推論解

釈で使える情報は少ないので、推意は一つに決定できない。それを一つに絞る圧力が「外部の物語の自動的・固定的運用」である。そういう授業を受けた学習者は、複数の推意から教師自身の好みにより選択された推意を決定する。「教師の物語」を暗黙の内に習得し、以後の授業ではその「物語」を駆使して授業やテストに対応する。そういう「教師の物語」を受容できるのはいわゆるいい子だろう。その「物語」を受容できない、解釈の原理上は全く理にかなった行動をとる学習者は、排除されるのである。そしてその排除は今も続いている。

### 三 世界解釈と内部の物語

私たちが推論解釈する際、既有的の知識や発話の状況などの情報を基にして行くと述べた。それらの情報の背後にまた前提に、それらの情報は一定の世界（通常は現実世界）についてのものであるという前提があるはずである。その文章には一切現れずとも、その文章が現実世界を対象としたものであるならば、（例えば、説明文、ものを上から落とせば下に落ちるし、何も身につけない人間は空を飛ぶことはできない。そのような因果律（ルール）が支配する記述である）前提に持っているはずである。テキスト解釈の前提には世界の解釈（その物語世界がいかなる世界かという吟味）が必要なのである。といつても、テキスト解釈を行う前に世界解釈を行っているのではなく、テキストの解釈を行うと同時に、物語世界の想定を例えば、「空を飛ぶ」という記述から、あるいは発話の状況から行っているのである。

もちろん、現実世界とおなじ因果律が支配する世界が物語の世界

である作品もあるだろう。しかし、かなりの作品はその物語世界が支配する因果律が現実世界と異なっている。では、どのようにして現実世界とは異なる因果律を持つ世界を想定しているのだろうか。そのような世界の（因果律の）想定について、三浦はインガルデンの設定した虚構世界における未規定箇所への推測の原則を援用しながら、次のように説明している（1988）。

- 1 一般的事実や法則については、現実世界との類似を最大にする。
- 2 論理的整合性を保つ
- 3 個別的出来事どうしの関係は、規定された図式的構造内における個別的出来事間との関係が成り立っているとする
- 4 個別的出来事の内容については、芸術的もつともらしさにもとづいて、そのつど定めなければならない。

これを見ると、世界の因果律の想定は、一般性の高い事柄については現実世界と共通の尺度でいいが、個別的な出来事についてはその虚構世界に応じて変わってくると読める。では、書かれてもいず、また一般性も高くない事柄についてはどうだろう。例えば、登場人物がどんな人物であるかとか、登場人物が生きた状況はどんな状況であったかなのである。このような、書かれたことから書かれていない世界について、想定を行うとき、そして、その想定において、現実世界の因果律も物語世界内部の因果律も使えないとき、現れるのが、「内部の物語（の自動的・固定的運用）」である。

野家（1990b）が、「物語文は複数の出来事の間因果関係のコンテキストを設定する役割を果たす（558）」と述べるように、「物語」すなわちある対象に対する解釈図式は、表面上は時間関係を表すだけに見えるが、その内実は因果関係すなわち因果律を形成する

ものである。

作品に出会った読者が、テキスト解釈のために物語世界の因果律を設定するのだが、その際、現実世界の因果律も物語世界内部の因果律も使えないとき、読者内部が持つ因果律すなわち読者自身の「内部の物語」が自動的に発動し、因果律を構築するのである。

例えば、物語のある人物の人物像について考えてみる。彼の人物像はテキストに明記されていないし、また彼の人物像を明らかにするのはテキスト解釈における、推論解釈の目的ではない。しかし、彼の人物像は彼の発言・行動の意図を推論解釈する際の有力な情報となるだろう。では、彼の人物像はどのようにしてわかるのだろうか。それは結局、彼の言動や行動から推論するしかない。「こういう発言をしたから」「こういう行動をしたから」彼の人物像はこうだ、と考えることになる。その時の因果律は、まず現実世界の因果律を使うことになるが、行動や言動からその人の人物像を明確に浮かび上がらせるような明確な因果律はそれ程多くない。よくしゃべるからといってその人が陽気な人とは限らず、さびしがりやの裏返しかもしれない。結局、解釈者が推論に使う情報をどの範囲にし、またそこからどのような推論を行うかは、解釈者の持つ解釈図式、つまり「内部の物語」によるしかないのである。

この、内部の物語は実は、テキスト解釈のレベルでも現れる。文学では、語りの世界や現実世界レベルの推論解釈では結果を一つに絞れないことは先述した。その時、教師や他の研究者により、「外部の物語」が押しつけられる場合もあるが、解釈者の「内部の物語」それは、「外部の物語」の内面化したものかもしれない）により、解釈とは別のレベルで一つに選択しているかもしれない。つまり、



自己の内部には複数の解釈があるのに、「内部の物語」の抑圧により、選択が行われているかもしれないのである。

また、さらに大きな「内部の物語」が存在している。それは、作品そのものである。作品は作者が構築しようとした世界を彼の持つ「内部の物語」により解釈し、記述した、それ自体が作家の「内部の物語」による世界解釈の記述である。読者は、作品を読みながら、虚構である物語世界を自己の「内部の物語」で解釈する。そこで、作家の「内部の物語」と拮抗するのである。世界解釈という点では、作品と読者の解釈とは、「作家による世界解釈に関する「内部の物語」の表明」と「読者による世界解釈に関する「内部の物語」の表明」という点で、対置されるべきものである。

#### 四 自動化された物語に対抗するために

さて、これまで解釈や作品構造を細かく見ていくことで、物語の介入ぶりについて考えてきた。通常の音声言語の解釈においてはその可能性を考えなくてよいこと、また作品における物語世界でのレベルでも人物の発話の意図を推論する際も「物語」の介入の可能性は低いこと、語りの世界や現実世界のレベルでは物語の介入の可能性が高まること、また、物語世界であっても、人物の人物像などの世界存在に関わることには、物語の介入が大いに考えられることを述べた。

この最後の点については、音声言語のコミュニケーションにおいても、相手の発話の推論ではなく、相手の人物像の推論という事を考えると同じことが起こる。この現実の世界の存在に関わることについては、私たちは、「内部の物語」にしろ「外部の物語」にしろ、

何らかの、明文化されない「物語」により解釈を行っているのである。現実世界にしろ物語の世界にしろ、世界の解釈については（自動化された）物語が必ず介入するのである。

では、これらの「物語」の介入について、国語教育においてどう対処すればいいのだろうか。もう一度本論における国語の授業の教育内容を挙げるとそれは、「その作品に衝撃を受け、読者自体の世界が作品の力によって変容させられる」ことであった。私は、これを次のように読み変えたい。「作品によって、学習者の「内部の物語」を変革すること」。

この教育内容のために、どのような授業を作っていけばいいのだろうか。例えば、学習者の「内部の物語」による解釈結果」に對置する形で（もちろん押しつけるのは言語道断だが）教師の「内部の物語」による解釈結果」を示しても、表面上は受け入れるだろうが、実は反発するか無視するかのいずれかであろう。ある「物語」による解釈結果を別な「物語」による解釈結果と並べても、「物語」自体の変革は起こらないだろう。

大事なのは、「物語」そのものを露呈させ、相手の「物語」そのものと対置させることである。つまり、己が行った解釈結果をとるに至った、内なる根拠、内なる因果律を示すことである。例えば、作家の意図を考えると、そのような解釈結果に至った根拠を作家の実人生や作品構造に求めるだけでなく（それらは「物語」の始発に過ぎない）そこから結果に至った、解釈者自身の内なる因果律を示すのである。

その因果律は論理的であるはずがない。その因果律は、その解釈者が現実世界の人物を見るときにとる因果律と重なる、偏見に満ち

た独りよがりなものかもしれない。しかし、そのような「物語」を露呈させ、学習者の「内部の物語」と対置したとき、互いの「物語」はゆさぶりを起こし始める。

教師は、自己の偏見に満ちた「物語」の結果を提示し、「物語」を因果律にして（おそらくその中には教師の実人生からの経験が入っているだろう）提示することで、教室は混乱し、学習者は異議申し立てを始める。そこから全ては始まるのである。

教材研究も同じである。教材となる作品も世界を作家自身の「内部の物語」によって解釈したものである。教師は（あるいは文学評論家は、現実世界レベルでの研究、つまり徹底的な作家研究を通して、「作者の「内部の物語」を露呈させ、それを学習者につけなければならぬ。もちろん、その「内部の物語」自体が、教師あるいは評論家の「内部の物語」による産物であることの留保付きで。

このようにして露呈された、教師の、また作家の「内部の物語」は、学習者にとって「了解不能な他者」として立ち上がっているだろう。この先をどうするか。それには、異文化というおなじく「了解不能な他者」と分かり合おうとする営みである異文化接触についての実践・研究が参考になるだろう（難波1996参照）。国語の授業は、了解不能な他者を引きずり出し、自己改革や世界改革を通して何とかその他者と分かり合おうとすることを通して、他者を世界を自己を理解するためのレッスンの場になるべきだと私は考えている。

（参考文献）

- スベルベル・D、ウィルソン・D（一九八六）・内田聖一他訳（一九九三）『関連性理論』研究社出版

田中美（一九九四）「偏見の牙城―新しい作品論のために」日本近代文学第51集

中村三春（一九九四）『フィクションの機構』ひつじ書房

難波博孝（一九九五a）「コード解釈と推論解釈（1）」両輪（神戸大学発達科学部）15号

（一九九五b）「コード解釈と推論解釈（2）」両輪17号

（一九九六）「コード解釈と推論解釈（3）」両輪19号

難波博孝・今井美都子（一九九五）「帝国の教具としてのSAMBO」児童文学研究（日本児童文学学会）第28号

西村清和（一九九三）『フィクションの美学』勁草書房

野家啓一（一九九〇a）「虚膜皮実」の間」哲学（日本哲学会）40号

野家啓一（一九九〇b）「物語行為論序説」『物語』（現代哲学の冒険

8）岩波書店

三浦俊彦（一九九五）『虚構世界の存在論』勁草書房

（なんば・ひろたか／愛知県立大学）

自動化された「物語」から  
逃れるために

難波博孝

本論は、まず、「物語」を対象に対する解  
釈図式と定義し、その「物語」が私たちを自

動化された解釈へと誘惑していることを述べ  
る。次に、言語の解釈の過程を詳細に検討し、  
「物語」の介入の可能性を見る。次に、文学  
について三種の世界構造の考えを導入し、ま  
た、解釈における世界解釈のレベルを設定し、  
それぞれの諸相で「物語」の介入の可能性を  
探る。最後に自動化された「物語」から逃れ  
るために、国語の授業で行うべきことを述べ  
る。

## Beyond Standardized Reading: What Should We Do in a Literature Class?

HirotaKa Nanba

In this essay, primarily I will show how we are often tempted to turn every object into a set of narrative patterns and read things in a standardized fashion. Secondly, I will examine the process of interpreting and find where the narrative moment begins. Thirdly, from a hermeneutical viewpoint, I will classify literary interpretation into three patterns and follow each narrative formation. Finally, I would like to suggest the way to avoid such standardized reading in a literature class.